

共同研究テーマ「変革思想とアジア実学 ―初期社会主義を中心に―」趣意書

この共同研究テーマを設定する意義について、述べます。思想史の所期の目的とは、「今をいかに認識し、どう異化するか」ということであると考えます。国家が盤石の重みを持って、人々の生命とその暮らしを圧殺する現在の状況を目の当たりにし、われわれはどのようにこの状況に向き合い、この状況が生じた根源の追究をすべきなのかを念頭に置きつつ、まずはこの実践課題を共有したいと思います。

さて、初期社会主義研究に引きつけて申しますと、初期社会主義者という思索の主体が近代日本社会とその国家をどう対象化したか、その際の思想的なツールとなったのは西欧由来の社会思想でしたが、その根底、受容基盤となったのは儒学などに代表されるさまざまな伝統思想（それが伝統思想の全体の参照ではなくその断片の恣意的な引用だったとしても）でした。その社会主義受容のありかたを明らかにする作業は、伝統思想が彼らの社会および国家批判にどのような影響を与えたかを明らかにすることでもあります。そして、このことによって浮かび上がってくる、個人と社会および国家のありかたについての彼らの見解は、おそらく西欧的な社会観の引き写しではなく、伝統思想の影響を受けたあるいは受けざるを得なかったものであるとも思います。彼らの思索のありかたの多様性と、それぞれの偏差を明らかにすることで、近代日本の社会と国家への批判的理解とそれに基づく新たな社会構想・国家構想を拾い出したいと思います。ここにこそ「変革思想とアジア実学」というテーマを設定する意味があると考えます。

もっと具体的に申せば、社会を可塑的なものでなく所与のものとして捉える傾向、日本社会における個としての政治主体が自立し難い状況が現在に至るまで伏流しているように思えます。丸山眞男が、日本に政治小説が発達しなかった理由として、日本人は普段は非政治的だが、ある段階で一挙に全政治的になり、また非政治主義に帰って行くことをくり返す傾向があるとし、こういう状況に「健全な」政治意識は育ちにくい旨のことを述べていたことを想起します。（『大分県先哲叢書 矢野龍溪集』解説）そうであるならば、新しい変革の主体・倫理形成の主体を生み出そうとする思想的営為は、こうした精神風土・政治風土と切り結びつつおこなわれなければなりません。そしてそれは西欧的な政治主体形成論から生まれ得るものなのかどうか、むしろその論理からこぼれ落ちる課題こそが重要な意味を持ったのではないかと考えます。そのこぼれ落ちるものを、初期社会主義を含む変革思想はすくい取ることができたのか、あるいはできなかったのかを歴史的に検証することを目指したいと思います。このような視点から申せば、19世紀末からの東アジア社会においてさまざまな歴史的課題を意識しつつ提起された変革思想は、東アジアの伝統的社会のなかから、いかなる新しい変革の主体・倫理形成の主体を生み出そうとしたのかを確かめることも重要なかつ示唆的な作業となるのではないのでしょうか。この共同研究においては、国家を相対化する論理とそれをになう主体のありかたについての追究をおこなった人々の事例を、広く採り上げたいと考えております。